出展作品：「呼吸」

工藤 花奈

KUDO Hana

全国総合文化祭写真部門
優秀賞
迫桜高２年（石越町・第四）

「自然と魅する」

石越中ではソフトテニス部に所属していた工藤。高校入学後、学校パンフレットに掲載されていた写真部ＯＢの作品が目に留まった。もともと空や花など、自然の写真をスマホで撮影することが好きだった工藤は、きれいな作品に憧れて写真部への入部を決めた。

迫桜高写真部の活動は想像していたよりも忙しく、学校内外を毎日歩き回って撮影するほか、部員同士でお互いの写真を評価し合ったり市内の商店街と協力してポストカードの製作に取り組んだりすることもあった。全国総合文化祭（以下、総文祭）に出場するには、宮城県総合文化祭での入賞が絶対条件。人や影を題材にした作品に挑戦してみるも、いまいちピンとこない。

締め切りが近づく中、今まで一番多く撮影した「自然」に目を向けてみた。工藤が愛用するカメラは、ニコンの「Ｄ５６００」。いろいろと調べた中で、自然を撮影したときの雰囲気が、工藤のイメージに最も近かった。きれいな色が写真に映えるのではと考え、花を題材に決めたものの、それだけでは物足りない。花の美しさと併せ、尊さも表現できないかと思いついたのが、もう一つ、自然のものである水との組み合わせ。大きな水槽にバラの花を沈めてみると、ゆっくりと気泡が現れた。これだー。普段目には見えない呼吸を表現することに成功した。真上から何度もシャッターを切る。途中、色のバランスやカメラの設定を調整しながら、納得いくまで撮影を繰り返した。

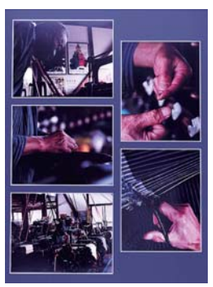
「全国に出場出来たらうれしい」と出品した作品は、その目標を大きく飛び越え、全国６位に当たる優秀賞を獲得。審査員からは「将来を期待している。写真家は目指さないのですか」とも声を掛けられた。和歌山県の会場で入賞を目にした工藤は「うれしいよりも驚きが大きかった」と、当時の心境をはにかみながら語った。

現在は、次回の総文祭に向けて、部の仲間と協力しながら新しい作品の制作へ取り掛かっている。全国での実績を手にしてもなお、「さまざまな構図にチャレンジして技術を上げ、もっと上を目指したい」と、冷静に次の大会を見据える。技術と感性に磨きを掛け、再び全国の舞台での躍動を誓った。

迫桜高２年（石越町・長根）

小野寺 あゆみ

全国高校総合文化祭
写真部門出展



出展作品：「時を織る」

「臨場感を生かして」

小野寺は、愛猫を撮影するため、中学１年のときにデジカメを買ってもらったことがカメラとの出会い。

今回の作品では、「身近なモノを作る過程を撮影したかった」と、職人をテーマに掲げた。顧問の菊池純（じゅん）先生に地元の職人を紹介してもらい、実際に作業している風景を撮影させてもらった。さまざまな角度から撮影を重ね、学校に戻ってから印刷してみる。「手元のアップだけでなく、全体の写真も組み込むことで作業場の雰囲気を伝えたかった」と、組み写真にして臨場感が出るように工夫。何通りも試行錯誤を繰り返しながら組み合わせを試していく。職人ならではの眼光鋭い表情が小野寺の作品をより引き立てた。完成した作品は、宮城県総合文化祭で銀賞を受賞し、全国へと推薦。全国での入賞とはならなかったが、小野寺は「きれいに撮るだけでなく、写真自体に意味を持たせられるようにしたい」と前を向く。次の全国での入賞を視野に、今日もシャッターを切り続ける。

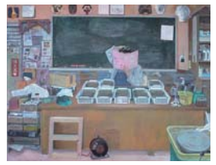
夏に挑む　Zoom Up Tome 2021 Special

全国高校総合文化祭
美術・工芸部門出展

「この場所とともに」

高校で初めて美術部に入部した大山。１年生の時に高校近くの八百屋を細かく繊細に表現した作品が県高校美術展で優秀賞に選ばれ、緻密な作品を描くことに楽しさを覚えた。

総文祭に出展する題材を探しに市内のさまざまなところを歩き回るも、なかなか決まらない。顧問の阿部和弘（かずひろ）先生に相談すると「身近にあるもので自分が良いなと思うものは何かないか」と言葉が返ってきた。周りを見渡すと、思い出の詰まった美術室が広がっていた。「ここをテーマに作品を描いてみよう」。締め切りまでは３カ月あったものの、細かな部分を含めた表現力が持ち味の大山の作品は時間を要する。１日８時間キャンバスに向かう日もありながら最後まで手を抜かず、納得いく作品が完成。県代表として全国へ推薦された。阿部先生は「色合いがきれいで温かみのある大山君らしい作品」と、笑みを浮かべながら称えた。「将来は、空間デザインに関する仕事がしたい」と話す大山。美術部で磨いた感性は今後も生き続ける。



出展作品：「さこう美術室」

佐沼高３年

大山 翔太（しょうた）